

日本語動詞の語彙的な意味使用の分析

- アソブを中心に -

金 到 閔*

(e-mail : Kim30ms@hanmail.net)

< 목 차 >

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 3.1. ガ格名詞かセトの場合 |
| 2. 先行研究と研究方法 | 3.2. ガ格名詞かイキモノの場合 |
| 2.1. 先行研究 | 3.3. ガ格名詞かその他のアソブとの構成 |
| 2.2. 研究方法 | 4. おわりに |
| 3. 名詞の格形式と結合能力でのアソブとの関係 | |

キーワード：格形式(Case form type), 結合(Combination), アソブ(Asobu), 意味(Meaning), 対照研究(Contrastive study)

1. はじめに

本論文では日本語の動詞項目アソブを語彙的な意味用法について考察してみようとする。動詞項目のことを考えるなら、言語外の現実としての人間の活動が行為という面にかぎっても、アソブ以外に、労働・生産にかかわる動詞、知的活動にかかわる動詞など、アソブ以上に人間にとって重要と見られる活動・行為をさしめず動詞類がある。『分類語彙表』¹⁾でみると、「労働・作業・休暇」の項目は50行にわたるのに対して、アソブの属する「遊楽」の項は半分以下の19行であるなど、量的に明白な差がある²⁾。

アソブ活動は知的活動や労働・生産活動と比較しても、人間活動のなかに占めることは広いとは言えないが、哲学的な部分においては、ホモ・サピエンス(考える人)、ホモ・

* 嶺南外国語大学, 外來教授, 語彙論

1) 国立国語研究所(2004) 『分類語彙表』(増補改訂版)大日本図書 秀英出版 pp.18-295.

2) 金到閔(2016) 「日本語アソブ・アソビおよびそれぞれを要素とする複合語の意味・用法」別府大学大学院文学研究科, 日本語・日本文学専攻, 博士学位論文, p.3.

ファーベル(道具をつくる人)とともに、ホモ・ルーデンス(アソブ人)という側面を人間の人間らしさをなりたさせる重要な側面の一つとしてとりだした、ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』³⁾のような著作がある。同じように人間にとってのアソビの意義を認めたカイヨワ『遊びと人間』⁴⁾もある。日本語でかかれた芦原すなお(2000)「遊ぶ」『動詞の人生』⁵⁾のにも、アソビの高い位置づけ⁶⁾がなされている。

本論文でもこれらの先駆的な著作を基にして、言語外の現実における人間にとってのアソブを研究対象としてとりあげていく。

2. 先行研究と研究方法

2.1. 先行研究

動詞の意味・用法をめぐるのは、宮島達夫(1972)がある。宮島(1972)は、単語の意味を分析すると、意味があれこれの意味特徴に分割されること、意味の記述はそのような意味特徴にもとづいてすすめることができるということを指摘し、実践⁷⁾している。宮島(1972)の具体的な動詞の意味記述の中でアソブにふれているところはちょっと少ないことで本論文では直接的に役にたつことはないことである。

アソブ動詞はいくつもの意味をもっている多義語であるが、本論文では一般的な多義語の意味構造としてとらえるようにする。この方法で動詞「みる」を分析した論文に、奥田靖雄(1967)がある。奥田(1967)は語彙と文法の対立を認めたくえて、語彙的なものと文法的なものとの相関を問題にし、語彙的な意味のあつかいが文法的な構造を無視してはおこなえないこと⁸⁾をのべている。本論文でも、奥田(1967)の説をうけいれて、アソブの意味においては、文法的な現象に注意し、意味の区分にかかわっている文法的な事実をとりだそうとするのである。

また、森田良行(1994)の『動詞の意味論的文法研究』にも見られる。

3) ホイジンガ(1981)『ホモ・ルーデンス』(里見元一郎 訳) 河出書房新社 p.67、 p.104.

4) カイヨワ(1994)『遊びと人間』(Roger Caillois 著) 文芸出版社 pp.33-34.

5) 芦原すなお(2000)「遊ぶ」『動詞の人生』岩波書店 p.42.

6) 金到閔(2016)「日本語アソブ・アソビおよびそれぞれを要素とする複合語の意味・用法」別府大学大学院 文学研究科, 日本語・日本文学専攻, 博士学位論文, p.4.

7) 上掲書 p.5.

8) 上掲書 p.6.

動詞の格支配とその動詞が表す意味との関係を記述することは、語義記述の前提として必要なことである⁹⁾。

と指摘し、格支配が語義に影響をあたえていることを述べる。動詞はその意味の内容から動作や作用を成立させるのに必要な種々の事柄を名詞から、具体的には名詞の「格」の形で要求¹⁰⁾する。必要成分からの名詞句をとっている動詞文型がその動詞の「意味」において形式も言語によって決まっていると記述している。

本論文の資料においては、新潮社と青空文庫CD-ROM版や国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(少納言)、日本語の雑誌などを使っている。

2.2. 研究方法

日本語動詞のアソブに関して、確かに研究的な著書をとった論文と専門書はあまり出ていないし、それで辞書の体裁をとったものなかから、アソブの意味・用法を考察するさい、あれこれの点で価値がある情報を含んでいるものをとりあげようとする。いろいろな辞書の中で本論文では『例解国語辞典』と『学研国語大辞典』を主にとりあつかって記述していく。

辞書において語釈とともに用例がのせているが、奥田(1967)は下記のように説明している。

中教出版の『例解国語辞典』が現代日本語の語彙的な意味の記述ですぐれていることは定評がある¹¹⁾。

と言われている。それで次の『例解国語辞典』¹²⁾のアソブという単語の解釈と用例文を察することができる。

動詞の「遊ぶ」(動四)[他動は「遊ばす」「遊ばせる」]は、

① 運動や遊戯など好きなことをして楽しむ。

「テニスをして遊ぶ」

9) 森田良行(1994)『動詞の意味論的文法研究』明治書院 p.65.

10) 金到閏(2016)「日本語アソブ・アソビおよびそれを要素とする複合語の意味・用法」別府大学大学院文学研究科, 日本語・日本文学専攻, 博士学位論文 p.6.

11) 奥田靖雄(1967)「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8号、同(1985)『ことばの研究・序説』むぎ書房 p.3.

12) 時枝誠記(1975)『例解国語辞典』増訂版 中教出版 p.13.

- ② 意味・価値のあることをしないでのらくらする。
「遊んでばかりいないで仕事に精を出せ」「遊んで暮らす」
- ③ 仕事がなくてぶらぶらする。
- ④ 場所や道具などが有意義に使われないでいる。
「原料不足で機械が遊んでいる」「遊んでいる土地」
- ⑤ ある場所へ行ってそこで楽しむ。[文語的な言い方]
「鎌倉に遊ぶ」
- ⑥ 酒席にふける。遊興する。

[遊ぶす](動四)[自動は「遊ぶ」。仮定・命令形は「遊ばせる」の形の方を使う])は、

- ① 遊ばせる。
「子供を日なたで遊ばせる」
- ② 仕事をさせないでおく。ひまにさせておく。
「役を与えないで人を遊ばせる」「機械を遊ばしておく」
- ③ (接尾)動作を「する」意の最上級の敬語。なさる。
[「お」「御(ご)を冠した動詞連用形または体言に直接に付く]
「本をお読み遊ばす」「あれを御覧遊ばせ」

[遊ばせる](動下一)→遊ぶす

次に、『学研国語大辞典』¹³⁾(1980)は現代語中心の編纂で、実例をのせている点でめだっているし、内容は次のようである。

動詞の「遊ぶ」は、

- ① [体を動かして]好きなことをして楽しむ。
「ひとりで遊ぶ」
- ② 仕事や有意義なことをしないでぶらぶらする。
- ③ 酒色にふける。
「紅灯の巷に遊ぶ」
- ④ [場所・道具・機械・労力などが]有効に使われないでいる。
「注文がなく機械が遊ぶ」
- ⑤ [文]ある土地へ行ってその風物などを楽しむ。
- ⑥ [文]他郷に学ぶ。遊学する。

13) 金田一春彦外(1980)『学研国語大辞典』第二版 学習研究社 p.32.

⑦ 野球で、投手が故意にストライクを避けて、ボールを投げる。

「一球一遊ぶ」(参)投

手のカウントが有利なとき、打者の打ち気を外すためなどに行う。

「遊び球を投げる」「捨て球を投げる」などともいう。

[遊ばせる]≪他下一≫遊ぶようにさせる。

「子供を公園で遊ばせる」「機械を遊ばせる。(稼働させナイデオク)」

このような辞書上のアソブの意味が多様に使われていることがわかる。これらの用例をもとにして格形式とのくみあわせを分析していく。

3. 名詞の格形式と結合能力でのアソブとの関係

アソブの用法をあつかうとき、名詞の格形式との結合能力から使われるアソブをとりあげていく。

奥田(1985)ほかの文献に取り上げられている、日本語の連語論的な記述において、ガ格名詞をカザリとする連語というものは、原則としてあらわれてこない¹⁴⁾。だが、例外にガ格名詞と形容詞とのくみあわせを対象とした、根本今朝男(1961)¹⁵⁾「ガ格の名詞とのくみあわせ」(『ことばの研究』)があることがわかる。

しかし、その後、連語論研究を積極的に進めるサークルのなかにも、名詞をカザリとする連語の記述にあたって、ガ格をくわえることに関する論議がおこっているようである。そのなかのなかにも、松本泰丈(2005)¹⁶⁾「連語のくみたてにくわる名詞」のような論文も出てきている。この点に関するほりさげは小論では割愛するが、アソブの意味の分析・記述にあたって、アソブをカザラレとする格関係をとりあげる場合、陳述的な主語-述語関係を当面のところは別にして、ガ格名詞の内容面とアソブとの連語論的なむすびつきをとりあげる必要が、小論の研究を進めるなかで、実践的に要請¹⁷⁾されてきた。そこで、下記ではガ格名詞とア

14) 金到閏(2016)「日本語アソブ・アソビおよびそれぞれを要素とする複合語の意味・用法」別府大学大学院文学研究科, 日本語・日本文学専攻, 博士学位論文 p.56.

15) 根本今朝男(1961)「ガ格の名詞と形容詞とのくみあわせ」国立国語研究所(1961)『ことばの研究』秀英出版 p.83.

16) 松本泰丈(2005)「連語のくみたてにくわる名詞」『国文学解釈と鑑賞』890 pp.192-205.

17) 金到閏(2016)「日本語アソブ・アソビおよびそれぞれを要素とする複合語の意味・用法」別府大学大学院文学研究科, 日本語・日本文学専攻, 博士学位論文 p.56.

ソブとのくみあわせを扱っていく。

3.1. ガ格名詞がヒトの場合

アソビテがヒトをあらわすときには、動詞アソブはヒトの意志的な動作をあらわすのが一般的である。

- 1) 川崎の多摩川は日本一子どもが遊ぶ川、というくらい、子どもたちが川に入っていますね。私たちが子どもたちにノリ作りを教え始めてちょうど二十年たちます。
(神奈川県川崎市中原区(2008)『市政だより』)
- 2) 半年ぶりに訪れたこの都市は、最初なんの変化もなく彼の前に展かれていた。
昨夜つもった雪の上で幼い子供たちが遊んでいた。(新潮 斯波四郎『山塔』:72)
- 3) シゲちゃんの店の三十分五円の貸自転車を毎日借りて、町内をさっそうと走っていた。
ぼくらが遊んでいるところへすうと寄って来て、唐突に「フランス、ニギリス、ハメリカ、トレン」などと言ひ、またすうと去って行ったりした。
(峰岸達(2002)『私の昭和町』芸術・美術7 PHP研究所)
- 4) 前に行ったとき、夏だから、雨あがりの路地の中で子供たちが遊んでるわけだよ。
(『青』2000/11:59)
- 5) 夏の盛りには水遊びの人たちが群れ、鉄橋の橋桁から跳込みを競う者も多い場所であったが、九月も半ば近くになれば、流石に人影は少く、水際で数人の極く幼い子供たちだけが遊んでいた。河中では、農夫が馬を洗っていた。
(新潮 柴田翔『されどわれらが日々』:109)

上記の用例のアソビテであるヒトは全部「こども」である。アソブという動き(行為)が子供とむすびつきやすいことは常識的にも普通察することができる。子供のアソブ行為では、アソビの具体的な内容は上例のように必ずしも示されない。しかし、2)、4)のようにアソビ場所が川と路地のように記述されていれば、川あそびとか路地のような狭い空間でデキルゴムだん、石けり、ベーごまのようなあそびということはわかる。アソビの具体的な内容がかかれていなくても、こどものあそびは具体的、個別的な姿をとっている¹⁸⁾はずである。

また、こどものあそびとは、動作に対するアソブの行為であり意志性があるから、その用例が見られる。

18) 上掲書 p.57.

- 6) 小鴨が絶対喜ぶだろうな～って思ってたんですよね～♪ 思ったとおり、おおしやぎ(笑) どのパビリオンでも、夢中になって遊んでましたよお～ ^ ^ 特に楽しそうだったのが、木のおもちゃ館とまなびのハウス。(Yahoo!ブログ(2008)『生活と文化/グルメ、ドリン』)
- 7) 彼らは今テレビゲームに夢中になって遊んでいる。(研究社『新和英大辞典』:47)
- 8) 砂と水と漂着物だけで夢中になって遊んでいる。さて今日採集した主なもの「貝殻」「ビーチグラス(ガラスのかげら)」「石」そして「流木」。帰宅して取り出したら、アサリ位の大きさの二枚貝の貝殻は、もろくてほとんどが割れてしまっていた。(実著者不明(2005)『スローライフinふくしま ふくしまのやさしい暮らし』歴史春秋出版)

用例の6)～8)のように、アソブへむけられた心の方向性が強いし、集中度が見られるのもありふれたことだと言える。

また、こういうヒトのアソブ行為に対してプラス的に評価することができると見られる。

- 9) われわれは非常に愉快地に遊んだ。(研究社『新和英大辞典』:47)
- 10) 子供たちは楽しそうに遊んでいる。(研究社『新和英大辞典』:47)

上記のような副詞と修飾語句とのくみあわせの関係も可能になる。一方、アソブの仕事をする、「いそむ」ことに対立する面からはマイナス的な評価も見られる。ほかの人をたしなめるときの場合は次のようになる。

- 11) 大事な「子供時代」を奪うなんて、と人は眉をひそめるでしょう。一方、キプシギス族の母親は、ただ遊んでいるだけの無責任で怠惰なアメリカの子供を見て、これではとても立派な大人になれやしないと考えるはずです。(メレディス・F・スモール(2000)『赤ん坊にも理由がある』自然科学4角川書店)
- 12) その苦悩と格闘して乗り越えれば、人間をひと回りもふた回りも大きくします、若いときの良寛も曙覧も、ただ遊び狂ったわけではありません。呆けたような遊びのなかで、自分の思いが通らないしがらみへの反発から自分でも訳のわからない憤懣のはげ、口を求めていたのです。(武田鏡村(2003)『「独楽」という生き方 新・自己主義のすすめ』哲学1 ぶんか社)

上記のような言い回しには、そんな面があらわれる。もっとも、けんかとかいじめとかの完全にマイナス的な評価の行為をとがめられたときの用例も見られる。

- 13) 1歳の子供がいますがヒューは聞いたことなかったなあ…小児科へ受診されてみたらどうでしょう？何もなければ、それに越したことはないんだし。ただ遊んでだけならいいんですけどね…子供っているなことを、やって見せるのは親としては嬉しいんだけど心配にもなりますよね。何もなければいいですね！

(Yahoo!知恵袋(2005)『子育てと学校/子育て、出産』Yahoo!)

- 14) 今回の旅は男女四人ずつの賑やかな旅であり、取材といった仕事もない。ただ遊ぶだけの旅である。昼すぎに着いた空港の外へ一歩出るだけで、熱風が体にまとわりついてきた。汗が噴き出すのを感じ、香港はこの暑さだと記憶をよみがえらせた。

(松山巖1995)『闇のなかの石』文学9 文芸春秋)

上記のような弁解、ごまかしもあるようだが、このばあいも、いじめるのレベルでなく、ふざけっこをしているくらい、マイナス的な評価性のうすい行為だと言ってアソブを持ち出していると見られ、やはりプラス的な評価とはいえない。

- 15) その日パパのおうちからママのおうちに引越しをしたママのおうちでご馳走になったおなかいっぱいになって大きくなったから外で遊びなさいとママが言ったしほくも相したかった狭くて苦しなただから狭い滑り台を通り抜けてきたよー暗くて苦しなただけどすぐに明るくなってみんなの声が聞えたあ男の子ですよーって言っていたよ。

(Yahoo!ブログ(2008)『Yahoo!サービス』Yahoo!)

- 16) 「さあさあお前さん達は少し御庭へ出て御遊びなさい。(吾:388)

ただ15)のように「アソビナサイ、アソベ」と子供に積極的にアソブことをうながす、すすめる肯定の命令形もふつうにでてくる。アソブがつねにマイナス的な評価だったら、「(そんなに)アソブナ。」のようなうけしの命令形しかでてこないだろう。もっとも15)も、本論文に積極的にアソビをすすめているというより、「室内でぼんやりしているよりそとでアソベ。」とか「そばにいられると邪魔だからそとであそべ。」の厄介ばらいとかの感じ¹⁹⁾ではある。しかし、そういう意味あいの感じられないそとでアソベもあらわれることができる。

- 17) マのおうちに引越しをしたママのおうちでご馳走になったおなかいっぱいになって大きくなったから外で遊びなさいとママが言ったしほくも相したかった狭くて苦しなただから狭

19) 上掲書 p.58.

い滑り台を通り抜けてきたよー暗くて苦しかったのだけどすぐ明るくなってみんなの声が聞えたとあに男の子ですよーって(中略)言っていたよ。

(Yahoo!ブログ(2008)『Yahoo!サービス』)

- 18) 子どもだけでなく母親も交際範囲が狭く、「ママ友」などから孤立していることがあります。子どもに「友だちと遊びなさい」という以前に、自分が積極的にママ友や地域の人々と関わっていく姿勢を見せるべきでしょう。

(実著者不明(2005)『やさしくわかる発達心理学』哲学1 ナツメ社)

- 19) みんなとワイワイできる子になってほしい、というお気持ちはよくわかりますが、お母さんが遊びなさい、遊びなさいといってできるようなものではありません。

(斎藤次郎(1995)『子どもって、どうして…』社会科学3 風媒社)

遊興とか道楽といえる面を含むアソビはオトナがアソブさいに見られるものだが、第三者からの評価の点ではマイナスのつくアソビ²⁰⁾である。

- 20) あの人は若い時にずいぶん遊んだ。(研究社『新和英大辞典』:47)

- 21) それは例えば「前回の『B a b y t a l k』とは違う事したいね”ってアイデアを出した中で、“各地の知り合いのD Jの人達に参加してもらって遊ぼうじゃないか”ってなったこととか。その時に、殆ど断られなかったのよ。

(HISASHI(2004)『Glax“groovy” beat out! tours document book 10th year anniversary edition シンコー・ミュージック』芸術・美術7)

- 22) 「俺様から隠れられるものか。もう決闘は飽きたのか？ハリー、いますぐ息の根を止めて欲しいのか？出てこい、ハリー…出てきて遊ぼうじゃないか…あつという間だ…痛みもないかもしれぬ…俺様にはわかるはずもないが…死んだことがないからな」ハリーは墓石の陰でうずくまり、最後が来たことを悟った。(J・K・ローリング(2002)『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』文学9 下巻 松岡佑子(訳) 静山社)

もともと、これらのアソブも、アソブ本人にとっては、多少うしろめたい気持もあるとはいえ、マイナスというわけではない。あそんでたのしむ、興ずる面が消えていない点では、あとに見る「失職中」の意味の「仕事がなくであそんでいる」のアソブなどとは異なる。そのため「とことんアソブ」のようなくみあわせも可能²¹⁾なのである。

20) 金到閏(2016)「日本語アソブ・アソビおよびそれぞれを要素とする複合語の意味・用法」別府大学大学院文学研究科, 日本語・日本文学専攻, 博士学位論文 p.59.

子供のアソビは、例文 1)、4)、5)、9)にも出ているように、アソビテとしての子供は「子供たち」と「ぼくら」のように複数と集合であるばあいが多いが大部分である。「ひとりあそび」という特別な単語があるのは、一般的にはアソビがヒトが集まってすることをうつしだしている²²⁾のではないか。

勿論オトナも集団でおこない、意志的であったりし、熱中できるアソビをすることもあるが、用例は子供の場合約はあまり多くないことであった。

23) 昔この国の貴人たちが遊んだ蹴鞠は、鞠をいかに高く蹴り上げ、いかに地に落とさず長く続かせるか、というゲームだった。(『本の』2001/2:48)

下記の用例の23)はオトナが集団でするアソビである。なお、この連体句は、蹴鞠ヲアソブというくみあわせになりそうだから、これは他動詞的なアソブとしてあつかわれている²³⁾のである。そして、アソブがヒトとしての意味の場合「休む」の意味に使われることもある。その単語としては「やすらぐ」、「くつろぐ」の類型がある。これらの動詞はあまり距離的に移動がなく定置的なことをあらわしている。

◎ もう気持ちが安らぐ。(『エッセンス日韓辞典』, p.2845)

◎ 家族のみんな温泉で寛いでいる。(『エッセンス日韓辞典』, p.762)

これらの動詞の意味は「安らぐ」は穏やかで満ち足りた気持ちになる、「寛ぐ」は心身をゆったりと休めるという意味特徴をもっている。つまり、「やすらぐ」と「くつろぐ」は体の疲労を和らげ良い結果を得ようとするプラスイメージをあらわしている。このようなアソブの色々な意味の特徴的分類も察して見られる。

3.2. ガ格名詞がイキモノの場合

たとえば、存在をさしめすばあい、ヒトとヒト以外のイキモノは、両者以外のモノ(両者以外をモノで総称しておく)とちがって、存在動詞がアルでなく、イルになる点で区別がない。アソブも、ヒトがアソブ、イキモノがアソブのように同じ動詞とくみあわさるが、アソブの意味＝

21) 金到間(2016)「日本語アソブ・アソビおよびそれぞれを要素とする複合語の意味・用法」別府大学大学院文学研究科, 日本語・日本文学専攻, 博士学位論文 p.59.

22) 上掲書 p.61.

23) 上同.

内容面では同じとは言えないようである。

- 24) そこには食用になるすべての種類の木と青草が育ち、さらにその園を潤す川が流れ、空の鳥や野の獣が遊び、耕地が造られ家畜もいたという。(『図』2001/3:56~57)
- 25) 山の頂点まで整備されて赤松の美しい森にかこまれ、あいだには白楊、楊柳、アカシヤ、ムクゲなどが新しく植えられて栗鼠が遊んでいた。
(藤枝静男(1989)『昭和文学全集』)
- 26) 林には乾いた音をたてる紅葉を踏んで、鹿が遊ぶ。(新潮大岡信『折々のうた』:65)
- 27) 小さな村の端を飾る白樺の林が、まるで北国にいるかのような錯覚を起こさせる。水辺では羊たちが遊ぶ。(『本の』2000/10:6~7)
- 28) キラキラと輝く冬の海。菜の花の中で、ミツバチが遊んでいて、もう、これで家にたどり着けるなんて思うと、気持ちにも余裕が出てきて、ミツバチを観察したりする。
(Yahoo!ブログ(2008)『地域/日本』)

ヒトがアソブのは、子供であっても意志を持ってなにか個別的なアソビをおこない、そのさ
いなかアソビ道具を使うことも多いが、ヒト以外のイキモノがアソブときは本能的な行動で
あって、人間的な真の意志性が発揮されることはなく、個別的なアソビが多様に展開するこ
ともない。ましてアソビ道具が使われることなど普通はありえない。イキモノがアソブのがヒト、
コドモよりはるかに単純である²⁴⁾ことは、次のような用例文から考察できる。

- 29) 水は一所に集まり、かわいた所が現われました。
空には鳥が飛んで、地には獣が遊び、海には魚が泳ぐようになりました。
(Yahoo!ブログ(2008)『生活と文化/文化活動』)
- 30) 斎郷や富沢のいるテーブルに人をかき分けて歩み寄った。ひらひらと、熱帯魚が泳いでい
るように見えた。その足が一瞬止まった。表情が強張っていた。
(日下圭介(1991)「天の酒」『殺人事件』文学9 光文社)
- 31) 空には鳥が飛んで、地には獣が遊び、海には魚が泳ぐようになりました。
(Yahoo!ブログ(2008)『生活と文化/文化活動』Yahoo!)
- 32) これはまだ使っていない壺ですよ、おまけにいまは水をはって金魚が泳いでいるのだから、これ
は金魚鉢であって肥壺ではないのです、と。(梶山雄一(2003)『空入門』哲学1 春秋社)

24) 金到閏(2016)「日本語アソブ・アソビおよびそれぞれを要素とする複合語の意味・用法」別府大学大学院
文学研究科, 日本語・日本文学専攻, 博士学位論文 p.64.

この用例では「獣が遊ぶ」が「魚が泳ぐ」とセットになって使われている。そのことはこのアソビがヒトのときに見るような個別的なアソビでないことをしめしている。「魚が泳ぐ」のは魚に固有の生物的な動作である。「獣が遊ぶ」は「泳ぐ」より広いとしても、歩いたり、走ったり、寝そべったり、木にのぼったり…という、うごき回ることを指していればよいようである。25)

イキモノがアソブ空間は用例の27)(や28)のように、ドコドコデと動作空間としてとらえられることもあるが、24)、25)、26)のようにドコドコニと存在空間としてあらわれる例も見られるし、その数も少なくなさそう26)である。その用例もあらわれている。

33) サンルーカルのいかにも南国的な白い町がかがやいて見え、河岸の牧場に闘牛の牛が遊んでいた。さらに河をのぼって船は終点のセビリャに着いた。

(勝田保世(1987)『スペイン読本』歴史2 日本ペンクラブ編 福武書店)

34) 実在するモチーフに置き換え、空に鶴、海に 亀が遊び、島には松竹梅が茂る姿に表される。(長崎巖(2005)『きものと裂のことは案内』小学館)

次のように場所のドコドコをアソブとなるものは少ない用例しか見られていないが、移動空間をあらわしていて、イキモノがアソブが、ただうごき回ることに傾くことを見えている。

35) ガン両河の間の広大な丘陵地帯を胡麻塩のように見える放牧の群れが遊び、荷物運搬の駱駝車、牛車が見られるこの街道にいまはすれちがう馬車ひとつなく生きの影ひとつ見えなく、10時間に余る冬のバス旅行はあまり楽しいものではない。

(尾崎彦朔(2004)『「戦争と革命」の時代を生きて』有学書林)

36) 恨みを抱いて立ちつくすような風情のススキは心寒いものだが、こうして昼下がり、暖かみのある秋の陽のもと、銀白色に輝く穂波を見るのは悪いものではない。ほわほわとした綿毛が風にさまざまに揺れるさまは、ウサギの大群が遊んでいるようでもある。だがそれも、日がな一日眺めているとなれば、話は別だ。

(森谷明子(2005)『れんげ野原のまんなかで』文学9 東京創元社)

このようにイキモノがアソブがヒトがアソブと基本的なうごきの点でちがっているとしても、同

25) 上同.

26) 上同.

じアソブという動詞であることに支えられているから、ヒトがアソブ場合に見られるくみあわせが出てくることがある。

- 37) その別当坊に飼われている犬が板をくわえてきて海にぼんとほうりこみ、板の上に乗って、潮にのりつつ日ごとに堺の港にあそびに行ったという。
(司馬遼太郎(2005)『甲賀と伊賀のみち、砂鉄のみちほか』朝日新聞社)
- 38) お庭にちょうちいが遊びに来たよ♪ きょうは朝から曇り空雨は降らなかったけど、一日中スッキリないお天気天気はなちゃんも見つけて、じ〜と目で追っています。
(Yahoo!ブログ(2008)『家庭と住まい/ペット、動物』)
- 39) 釣り道具を持ってこなかったことを後悔しつつ、ときおりウサギが遊びにくるキャンプ・サトでのんびり過ごした。(齊藤政喜(1998)『シェルパ齊藤の行きあたりばっ旅』)

アソビにクルとアソビにイクは、動作主体がイキモノをあらわしたから、ヒトの場合とちがって、はっきりと意志性はないのである。ウサギなら走り出る、飛び出す、ちょうちいなら飛んでくることが擬人的にアソビにクルというくみあわせで見られるのである。38)は子供の発話らしく見せるための擬人化の面があるようだ。犬がアソビにイクは、子どもの発話に見せているわけではないが、イヌを完全にヒトあつかいにしている²⁷⁾といえる。

ただ、次の用例文のアソブは、内容面でも表現面でも上記の用例よりヒトがアソブに近接できそうだと見られる。

- 40) ひ帰りに土産だといって、趣味でやっている額入りの刺繍をプレゼントしてくれた。図柄は、鶏の親子が遊んでいるものであったが、翌九〇年に彼の家に行ったとき見ると、清水はそれを部屋に飾っていた。(織井青吾(2004)『韓国ヒロシマ村・陝川忘れえぬ被爆韓国人の友へ』社会科学3 評論社)
- 41) 動物と子どもをテーマにしたシリーズの第一作目であった。男の子と子犬が遊んでいる写真に、「未来を育む夢ワリシン」のコピーが付けられていた。
(田代恭介(1999)『日債銀破綻の原罪元行員からのレクイエム』)

表現面が「ヒトとイキモノがアソブ」であることは内容面にも影響していると考えられる。ここの動作には、走り回る以外に、なにかアソブ道具、たとえばボールなどをイキモノ(犬)が

27) 金到閏(2016)「日本語アソブ・アソビおよびそれぞれを要素とする複合語の意味・用法」別府大学大学院文学研究科, 日本語・日本文学専攻, 博士学位論文 p.65.

くわえる動作などが含まれる可能性がある。犬のほうでもっと遊ぼうという欲求を男の子に訴えることがあるとしたら、イキモノがわの意志性もないとはいえない。家畜(ペット)がヒトとアソブときは、イキモノがアソブ一般とは異なる面が言語外の現実としてあらわれ、それが言語にも反映すること²⁸⁾があるようだ。そして、親子がアソブというと、例えばにわとりであっても、ヒトの典型的なアソビだと言えるし、アソビあいてとのアソビを思わせることで、ヒトがアソブに近いと見られる。

3.3. ガ格名詞がその他のアソブとの構成

ヒトがアソブ、イキモノがアソブに比べて、そのヒト、イキモノ以外の名詞がガ格のかたちでアソブとくみ合わさる例は、あまり多くない。しかし、辞書にも「土地が遊んでいる」とか「手が遊んでいる」のような用例文がよくのっているので、広く探せばもっと集まる²⁹⁾と思う。

下記の用例は、ガ格名詞にモノ、広義のモノとしての(物件としての)土地、さらにヒトの心理現象にかかわる抽象的な名詞などがきて、それらがしかるべき働きを遂行していないことをあらわしている。この意味の場合、「～ガアソブ」という継続相の形であらわれるのが普通のようなのだが、下記の用例の42)のふたつめのように、一般的にいうばあいの「(機械が)アソブ」³⁰⁾がみられたし、その次の用例のように「アソビハジメル」という形のものも考察できる。

- 42) 「人手不足だろ。注文はどんどんあるのに、人がいなくて**機械が遊んで**るもんだから、学生を入れるんだ。」(新潮 三木卓『ブル-』:136)
- 43) 「一朱もやれば前栽物なんぞ、持ちきれないほど百姓家で分けてくれるのに、いくら**地面が遊んで**いるからって、苦労してうちで作る馬鹿があるものかね」…。(杉本苑子(1990)『夜叉神堂の男』)
- 44) 家にひきこもってテレビゲームをする子を、「社交嫌いで内省的だ」などと言っている親がいるが、あれこそは実体のない外界に**心が遊んで**いるだけである。(曾野綾子(2003著)『アラブの格言』)
- 45) 相対するすべてのものが一つになる空間に、**踊り手たちの魂が遊ぶ**。この地に私を導いた不思議な声は、彼らの魂の呼び声だったのかもしれない。(中上紀(2001)『雑誌/教育・学芸/季刊銀花』(通巻128号)文化出版局)

28) 上掲書 p.66.

29) 上同.

30) 上同.

46) ほとんどゼロになる、というニコル青年の主張は妥当なのである。それでは、主任の考えたように、レジを三台にすればどうなるであろう。計算の結果をみると、三台の場合の順番待ちの人数は〇・〇二、さらにレジを増やして四台にすれば、完全にゼロとなる。ただし、三台や四台になると、**レジが遊んでいる**だけの時間が非常に長くなり、ムダなことおびただしい。これでは、旧ソユーズ連邦の体制に逆戻りである。

(木下栄蔵(1992)『孫悟空はどこまで飛んだ? パラドックスの科学』淡文社)

ガ格名詞がヒトを意味していても、意志的ではない場合があったが、上記の用例ではヒトではないので、当然に意志性はあらわれない。また、イキモノの場合にはある動作性も認められないから、アソビデイルという形が普通になってくるのだろう。そういう状態にはいる、という意味のアソビハジメル³¹⁾はあってもおかしくない。

次の用例の「足が遊んでいる」は足がその機能を発揮していない、という部分があるとしても、上例ともに、辞書に出ている「手が遊んでいる」とは違うと見られる。

47) 「つま先は親指が一番前に出る“エジプト型”という形。足の甲と靴の甲の間にスキ間ができて**足が遊んで**しまい、かかとがすれて靴ズレになりやすい。また、内側に力がかかる歩き方なので、親指の内側も痛くなってくるのでは？」

(実著者不明(2002)『雑誌/総合/一般 non・no(ノンノ)』(No.6、第32巻第5号、通巻No.708号)集英社)

ここでも、足が足として機能しないことはあらわしているようだが、しかるべく機能しない条件-原因が「足の甲と靴の甲の間にスキ間ができて」のように明示されている。この点で辞書に一般的な「手が遊んでいる」ほどアソブの意味が抽象化してなくて、物理的、具体的³²⁾である。

アソブと構成されるガ格名詞が、連体節のなかなどで連用的なノ格の形で見られることは、普通あらわれる現象だと言える。下記にその用例をとりあげておことする。

48) 路地裏の多義性の言語ゲームの場、子供たちの**遊ぶ**空間では、自由な言語ゲームの場は、そのような政治的-経済的な中心化-ツリー状化-の都市の言語ゲームを逃れるように、リゾームをのばしています。

31) 上掲書 p.67.

32) 上同.

- (石田英敬(2003)『記号の知/メディアの知』言語8 東京大学出版会)
- 49) かくて遊戯を許された子どもは、不安や恐怖が自分の遊ぶ対象であることを直感する。
(碓浩一(2000)『母さん父さん、楽になろう 幼老共生のススメ』三五館)
- 50) 朗らかに、高らかに口ずさんで幼子たちの遊ぶ姿に癒され、頬をゆるめて立ち止まっている。(原笙子(2005)『やっぱり「不良」でした』下)

上記の用例を見るようにガ格名詞は連体節の中で連用的なノ格の形態をとっている「子供たちの遊ぶ」、「自分の遊ぶ」、「幼子たちの遊ぶ」のアソブことである。次にアソブのそのほかの意味の場合において「もてあそぶ」(弄ぶ、玩ぶ)の意味に使われることもある。

- 51) それは、権力を持った人々がこれらをもてあそんでいるからです。経済をもてあそび、政治経済をもてあそび、世界をもてあそんでいるのです。(上智大学 社会正義研究(2003)『日本における正義：国内外における諸問題』御茶の水書房)
- 52) 有給教育休業は、OECD加盟諸国が(中略)変化のプロセスに乗ってゆく産業秩序に労働組合を組み込んでゆく方法として、産業民主主義という考え方をもてあそんでいた頃に生まれた。(矢野裕俊外訳(2004)『生涯学習と新しい教育体制』学文社)

このようなアソブのいろいろな意味をとっているの中で「もてあそぶ」(弄ぶ、玩ぶ)(他五)は手に持って遊ぶ、思うままにする、おもちゃにするという意をあらわしている。この動詞はヒトとイキモの、その他の対象になる場合にマイナス的イメージの特徴をとっている。

4. おわりに

日本語動詞アソブに対して、できるだけ実例にもとづきながら、他の単語とのくみあわせのちがいにそって区別し、意味的なむすびつきの構造的な形態をとりだそうとした。そのなかでまとめることは下記のようなものである。

アソブの用例がもっともおおくあつまったのは、遊芸のほか行楽、さらに勉学もふくめて、シテ主体の一定の目的をもった意志的な行為または動作としてのアソブであった。

また、行乐的、遊学的なアソブをはじめ、アソブが移動をあらわす面もともなうことは多くあるが、それ以外にもアソビにイクのようにアソブための移動が必要なことも、言語外の現実

としておおくみられ、それが言語表現にも反映しているが、アソブそのものは、かならずしも移動をあらわれているとは言えないことも調べてみられた。

このような何もしないという面に特化したアソブは、ヒト名詞以外を主語にとることができる。「目がアソンドイル、手がアソンドイル」のように人体部分がかくるときは、必要を働きをしていないことをあらわす。将棋でも飛車がアソンドイルと言うのも同じ現象で見られる。「アソビごま」のような複合語は動詞アソブのこの意味がいかさされている。「機械が、設備が、アソンドイル」と言えば、これもやはりしかるべく作動せず、本来の役わりをはたしていないことを言う。

【参考文献】

- 奥田靖雄(1967) 「語彙的な意味のあり方」 『教育国語』 8号, 同(1985) 『ことばの研究・序説』 むぎ書房, p.3.
- カイヨワ(1994) 『遊びと人間』 (Roger Caillois 著) 文芸出版社, pp.33-34.
- 金田一春彦外(1980) 『学研国語大辞典』 第二版 学習研究社, p.32.
- 国広哲弥(1982) 「意味分析の方法」 『意味論の方法』 大修館書店, p.43, p.54.
- _____ (1994) 『動詞の意味論的文法研究』 明治書院, pp.42-44.
- 国立国語研究所(2004) 『分類語彙表』 (増補改訂版)大日本図書 秀英出版, pp.18-295.
- 芦原すなお(2000) 「遊ぶ」 『動詞の人生』 岩波書店, p.42.
- 時枝誠記(1975) 『例解国語辞典』 増訂版 中教出版, p.13.
- 根本今朝男(1961) 「ガ格の名詞と形容詞とのくみあわせ」 国立国語研究所(1961) 『ことばの研究』 秀英出版, p.83.
- ホイジンガ(1981) 『ホモルーデンス』 (里見元一郎 訳) 河出書房新社 p.67, p.104.
- 松本泰丈(2005) 「連語のくみたてにくわわる名詞」 『国文学解釈と鑑賞』 890, pp.192-205.
- 森田良行(1975) 『基礎日本語』 角川小辞典 8-2 角川書店, p.22.
- _____ (1994) 『動詞の意味論的文法研究』 明治書院, p.65.
- 金到閔(2005) 「日・韓両国語の動詞の意味と構文分析について」 『日語日文学研』 第52輯 2月号 韓国日語日文学会, pp.99-118.
- _____ (2016) 「日本語アソブ・アソビおよびそれぞれを要素とする複合語の意味・用法」 別府大学大学院 文学研究科, 日本語・日本文学専攻, 博士学位論文, pp.2-68.
- _____ (2016) 『日・韓両国語の語彙の対照研究』 学士院, pp.20-78.
- 孫洛範・安田吉実(2011) 『エッセンス日韓辞典』 民衆書林, pp.44-3199.

| |
|--------------------------|
| 논문 투고 일자 : 2016. 09. 25. |
| 논문 심사 일자 : 2016. 11. 02. |
| 게재 확정 일자 : 2016. 11. 03. |

 <要旨>

 日本語動詞の語彙的な意味使用の分析
 —アソブを中心に—

金到閔

本論文では日本語動詞アソブに関して、できるだけ実例に基づきながら、他の単語との組み合わせのちがいにそって区別し、意味的な結びつきの構造的タイプをとりだそうと試みてきた。その中でアソブの用例がもっとも多く見られたのは、遊芸のほか行楽、さらに勉強もふくめて、シテ主体の一定の目的をもった意志的な行為＝動作としてのアソブであった。

また、行乐的、遊学的なアソブをはじめ、アソブが移動の側面ともなうことは少なくなく、それ以外にもアソビにイクのようにアソブための移動が必要なものも、言語外の現実として多くみられ、それが言語表現にも反映しているが、アソブそのものは、必ずしも移動を不可欠のものとしているわけではないことも確認できた。

この何もしないという面に特化したアソブは、ヒト名詞以外を主語にとることができる。「目がアソビデイル、手がアソビデイル」のように人体部分かかるときは、必要な働きをしていないことをあらわす。将棋で飛車がアソビデイルも同様である。「アソビごま」のような複合語は動詞アソブのこの意味がいかされている。「機械が、設備が、アソビデイル」と言えば、これもやはりしかるべく作動せず、本来の役わりを果たしていないことを言う。この用法もヒトがアソビデイルと同じく、終止的な述語では、モノがアソビデイルという継続相の形が自然である。言語外の現実の出来事としても、この種のアソブは、ヒトの場合もヒト以外の場合もプラス評価をうけるようなものではない。

 A consideration of the lexical meaning use of the Japanese verb
 —focusing on asobu—

Kim, Do-Eun

This study is to classify the Japanese verb Asobu based on the actual usage, by the difference of composition with other words, and to deal with the structural type of semantic relation. Among them, Asobu's favors are most visible in Asobu as a willing act = motive with a certain purpose of the sate (subject), including leisure, education, etc.

In addition, there are a lot of travel and Aso departure as well as Asobu as a studying and studying abroad, and there is also a lot of movement that is necessary for Asobu, such as "to go to play", Asobu It was able to confirm that movement is not necessarily indispensable.

In terms of not doing anything like this, Asobu specialized can take other than Hito (person, person) noun as subject. When a human body part such as "the eye is playing, the hand is playing" is shown, it indicates that it does not perform necessary action. The same is true of 'horses (car) playing in the long run'. A compound word such as 'Asobigoma' means the meaning of Asobu. If a machine says that the facility is playing, this also means that it does not function properly and does not perform its original role. This usage is also natural in the form of a continuation of "things are playing" in the terminative predicate, just as "man is playing". As a non-verbal reality event, this kind of Asobu is not as if a "person's case" or "non-person case" receives a positive evaluation.